

三十分も新吉は凝平してゐた。

「五分間停車」とか、態と汽車がゴースタンしたりした。便所の穴へ水が流し放しになつてゐた。

炭酸瓦斯の爲に窒息しやしないか、心臓麻痺を起して死んでやしないか。

足音を忽ばせて名もない驛に停車すると、プラットホームから硝子戸のネヂをあけて、押しても矢立で詰めてあるので硝子戸が落ちない。

叩き割つて見るより、中の新吉の状態は不可知だつた。

新吉はそつと便所から出て、聯結臺を通つて次の客車を覗いて見た。

二人の巡査が向ふ向きに腰掛けてゐて、何か話してゐるので、反對の客車の方へ荷物を持つて走つて行つた。

二つ三つ三等室を過ぎると、一等の寢臺車があつた。

新吉は其處の喫煙室に腰掛けて休んだ。

綠色のカーテンが下ろされてない空席が、上にも下にもあつた。